

クラーク室内管弦楽団 第37回演奏会

“クラーク会館のクリスマス2015”

＜クラーク室内管弦楽団 中締め演奏会＞

2015年12月25日(金) 19:00 開演

北海道大学クラーク会館 講堂

入場無料

プログラム

J. シベリウス (1865-1957)

交響詩集「レンミンカイネン組曲」(4つの伝説曲)より

「トゥオネラの白鳥」Op. 22-2

A. ハチャトリアン(1903-1978)

バイオリン協奏曲二短調

(バイオリン独奏：磐淵真里子)

J. ブラームス(1833-1897)

交響曲第2番二長調Op. 73

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595

(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター 下川部雅英)

プログラム・ノート

クラシック音楽の世界には、いわゆる「国民作曲家」と呼ばれる人がいます。そしてその代表格の1人が、シベリウスと言えるでしょう。彼の「フィンランディア」は第二の国家といわれるほどその国の雰囲気を表し、フィンランドの人々に深く愛されているそうです。シベリウスにはフィンランドに古くから伝わる民族叙事詩カレワラを題材にした作品も多く、「レミンカイネン組曲」もその1つです。本日演奏する「**トゥオネラの白鳥**」は、この組曲の中でも単独曲として演奏会に取り上げられる機会が最も多いと言われています。主人公が船を作るための呪文を求めて死の国トゥオネラに行き、結局怖くなって逃げ帰って来るという話の筋ですが、この曲ではもっぱらトゥオネラ川を泳ぐ静謐な白鳥の様子を描いているということです。西洋の伝説では、白鳥は超自然的な力や死のイメージと強く結びついているようです。その様子をコール・アングレが歌い上げます。

本日2曲目の「**バイオリン協奏曲ニ短調**」を作曲したハチャトリアンは、アルメニアの作曲家です。よく知られている「剣の舞」からもわかるように、他のいわゆる「ロシア・ソ連」の作曲家とは一味もふた味も違う趣を持った楽曲をこしらえる人です。独特の躍動感と郷愁を誘う優美なメロディーを、磐淵真里子さんのソロでご堪能ください。

ブラームスの楽曲の「立派な」気分はドイツ古典派の特徴をよく表していると言えるかもしれません。そして20年あまりの歳月をかけて作曲した交響曲第1番の後、わずか4ヶ月で作曲した「**交響曲第2番ニ長調**」は、明るく未来への希望と喜びに満ちた音楽となっています。

私たち人間は、自分の国や文化にはない特徴を持った他国他文化の音楽（あるいは他の芸術作品）に魅力を感じ、愛することができます。つまり自分とは異なる多様性をお互いに尊重しあう力があるわけです。世界は今、民族・文化・宗教などの違いに対する寛容さをもう一度取り戻す必要があるのかもしれません。死と復活のこの季節に、よりよい未来を信じたいと思う次第です。

さて、クラーク室内管弦楽団は2003年12月の第1回演奏会から13年目を迎えました。創設者で代表の下川部先生のご退職を今年度末に控え、「中締め演奏会」として今回は「室内管弦楽団」としては少々大掛かりな選曲となりました。楽しんでいただければ幸いです。

(メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡)

[下川部雅英よりご挨拶]

クラーク会館で講演等を聞いた際に、「あのオルガンと遊ぶ方法はないものか」とずっと考えていたのですが、2003年11月に漸く発足させてから満12年、演奏会も37回目となりました。学内の音楽仲間と呼びかけ、足りないパートは学生オケや市内のオケの皆さんに手伝って頂いて何とか体裁を整えました。皆さんに余計な負担はかけまいと殆どの雑用を一人で賄ってきましたので、大学を去るにあたってもう続けられない旨を団員の皆さんにお伝えしたところ、幸い後継を名乗り出て下さる先生たちがおられたので来年度以降も続けられますが、取り敢えずは今回で小職の担当分の「中締め」とさせていただきます。

この間取り上げた曲は、ビバルディから本学の英国人教員が書いた曲まで110余曲、1曲でも参加して下さった人を合わせると150人近くの人々が演奏に参加して下さいました。旧知の仲とは言え、東京芸大の音楽部長を務められたピアノの先生、本学出身でピアノを弾く医師として有名な先生、スイスの著名なオケで吹いておられたフルートの先生なども一緒に遊んで下さいました。念願であったオルガンとの協演も、彼の「アルビノーニのアダージョ」を数回取り上げたほか、ヘンデル、バッハのオルガン協奏曲、モーツァルトの教会オルガンソナタなどで沢山遊ぶことが出来ました。本当は最後にサン=サーンスのオルガン交響曲で締めたかったのですが、3管編成の管弦楽と4手連弾のピアノが必要な上、クラーク会館のオルガンはそもそもバロックオルガンと云うことで諦めました。何事も腹八分が良いでしょう。

クラ管(クラーク室内管弦楽団)の活動はまだまだ続きます。今後とも、宜しくお願い申し上げます。

(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター)